

## ★言葉はだれかとつながるためにある★

8/29（金）の授業日。夏休みの思い出を胸に、子供たちの笑顔や歓声が校内に戻ってきました。今日は9月1日。2学期が本格的に始動します。初秋とは思えない暑さがしばらく続きますので、熱中症には引き続き注意が必要です。今学期も授業や行事を通して充実した学校生活が送れるよう、教職員一同、お子様の成長の支援に力を尽くします。



話は変わります。普段TVドラマを視聴することがほぼない私ですが、実は先月までNHKで放映された「舟を編む ～私、辞書つくります～」(全10話)にすっかり魅了されてしまいました。一冊の辞書「大渡海」製作に情熱と心血を注ぐ作り手たちの奮闘物語で、原作は大ベストセラー『舟を編む』(著者：三浦しをん 光文社 2011年9月16日発売)です。これ以前にアニメや映画にもなっているので、ご存知の方もいらっしゃるでしょう。一冊の辞書を作るために、十数年間に及ぶ時間と手間をかける根気と熱意が強く伝わってきました。

「辞書は言葉の海を渡る舟、編集者はその海を渡る舟を編んでいく」という意味で原作者は上記の書名にしたそうです。執筆にあたっては岩波書店および小学館の辞書編集部での取材を入念に行ったとのこと。辞書をもとにして言葉の大海原を渡る冒険にいざなう著者の志向性に変感銘を受け、早速本来の辞書の醍醐味を味わいたくなりました。



しかしながら昨今はデジタル隆盛の時代。何を調べるにも利便性の高いスマホ検索で疑問が即解決、あるいは解決したように思われます。私自身、幼少期から社会人になるまでを振り返ると、実に何冊のもの辞書にお世話になりました。辞書を引いた分だけ小口といわれる部分に染みつく手あかを眺めては、自分のささやかな努力を誇らしげに感じたこともありました。時間に追われ、効率を優先してきたためにこの経験はすっかり忘れ去られていました。この十数年、大切な何かをすくい取らずに生きてきたようで歯がゆい思いがします。

淡々と無機質に言葉が敷き詰められたように見える辞書。辞書に採用する紙へのこだわりもドラマでは展開されていました。「言葉は誰かを傷つけるためではなく、誰かを守り、誰かとつながるためにある」というメッセージは教育の根幹にもつながると感じ入りました。

本日は「防災の日」。「災」を『広辞苑第5版』で引くと「わざわい、災害、災難、火災」とありました。

ちなみに「さい」だけでも45通りの語釈が掲載されていました。目的語以外の周辺語にも偶然触れることで、新たな発見があるのが紙媒体の辞書。デジタルでは成し得ない体験だと思います。 文責：寺沢 光明